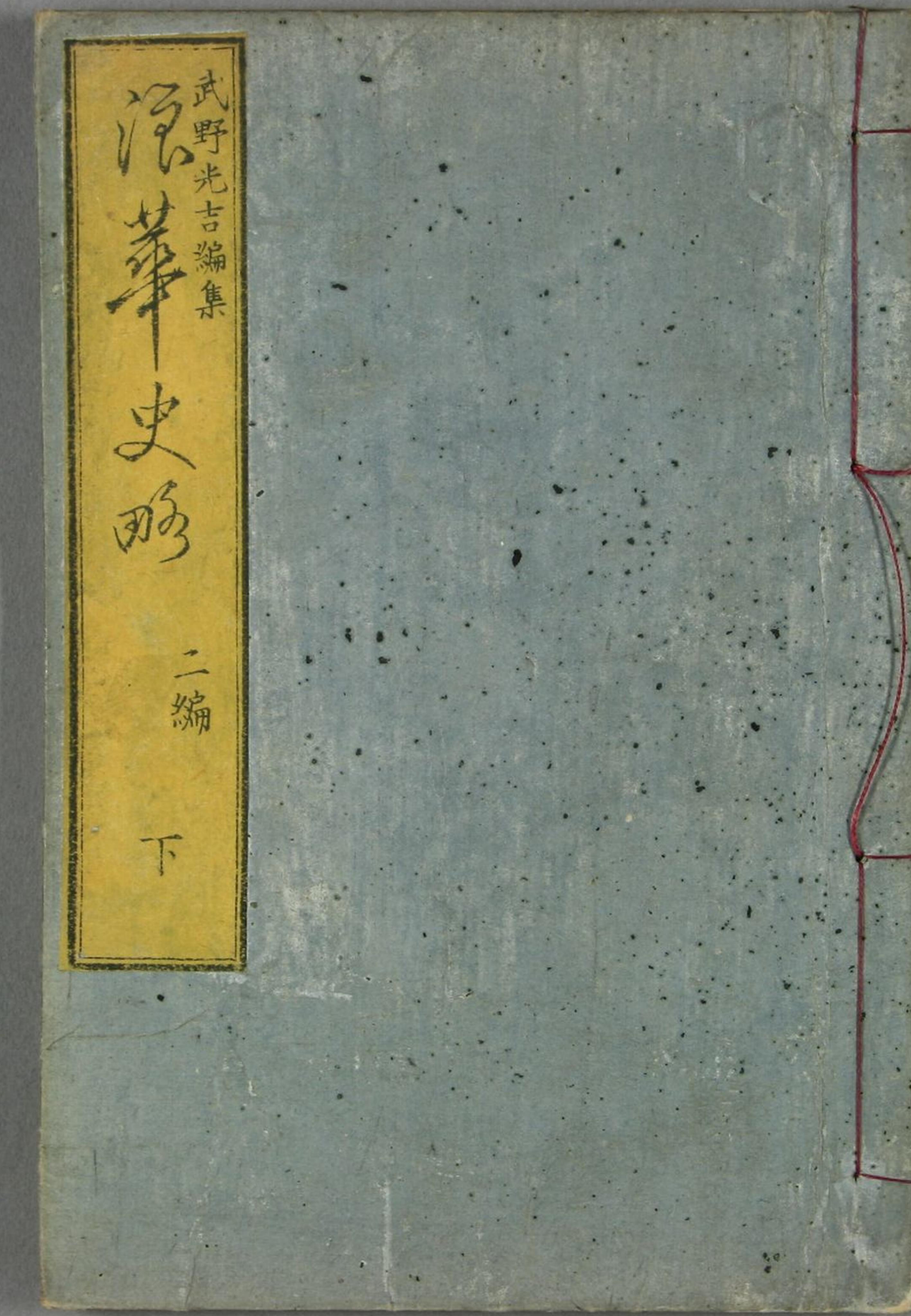


65

60

55

50



A414

4

浪花史畧第二輯卷之二

東京 武野光吉編集

○前回の續

嘗て小紀元一千二百七十五年 慶長十七年
十二月六日徳川公に之關東筋御鷹野へりけり入相の鐘
ふ帰路を急ぎてひ中泉へ着たりす頃も稍黃昏の
行黒きふ坵をむる群鳥の翥きあつて飛去つ
爰へ未審と仰面して寂々寒々たる中泉八

藩宮の森の中より候急久来る曲者をも供奉乃
面々さへ右と左ふ拂ひて君の馬前ス蹠づ
久之則ち別人すば馬場八右工門より就首
一て言りて天下不逆心の個之ゆけにて自安ふ
書戴奉つよと序桐バ自筆を證に拜呈せり大御
所披聞あると驚きゆひ大坂小違瓦ありもや
関東に恨むる諸藩斯の如くと書戴せり哉最理
ふ思召且ハ大久保忠隣支斯る逆心ありとさよ
うぞ余ハ久石見守述懐からと謀筆あるに疑起りぬ
是へあき瀧本流の能書ふく行ふべくもなみ片
桐が自筆あるべ一事兩端ふ明智も曇り馬場八
右工門ハ即時ふ本多佐渡守へ預けられて糺明あ
る斯く大御所公の江府へ所越ゆるの趣旨千代
田城へ進達ゆりけども將軍秀忠公所近と
稻毛サ出張ゆりて親子共同道ゆく江府へ入
城一ゆく兩公所密談ふふうびける又本多佐渡

守を以テ馬場が糾正ひりけり。忠隣へ同役の上坐
たり偏執を一もあらず。と復人情の常とて忠
隣が禍を伸冤まへき。夏もあく。仍く慶長十八年
正月上旬將軍家の命令として大久保相模守を
召し京師へ趣き。耶蘿宗門の予愈制禁申附
づき吉仰渡されり。忠隣何心あく。所受一花洛
とさへて登りける。跡よりへ刺客數十名人撰乃
く大久保京地ふての体裁片桐など。音信あ
るや委曲探索致すべーと嚴命ぜらるけを刺
客等を畏る。跡を慕ふく行雲の花洛の空乃
れり。斯く片桐且元の忠隣上京の報と得
き。方策圖ふ的わくと愉快の眉を開き急ぎ
家老小島庄兵衛を使節として相模守方へ念頃
ふ音信。江府の形勢復坂城の支んど依頼せ
り忠隣元來篤実あれを。那が懇情を感じト之に

報をふる禮を厚く一使節の交渉従々たゞ頑く片桐
紫陌へ妖言を流せり銭湯或は荆頭店紛々たる批評と
耳ふスハ大賣件あそ出來せり関東の一老職相州候
の伴天連の信者に殊ふ石見守述懐より野心を
さす狭坂と合謀を仍て片桐殿と入堀ありと
一犬虚を吼けりより萬犬実と傳うるのあらひ刺
客より遠旨追々関東へ注進りりふふ借の疑
ひもあく忠憐野心よ究りたりと竟ニ將軍の

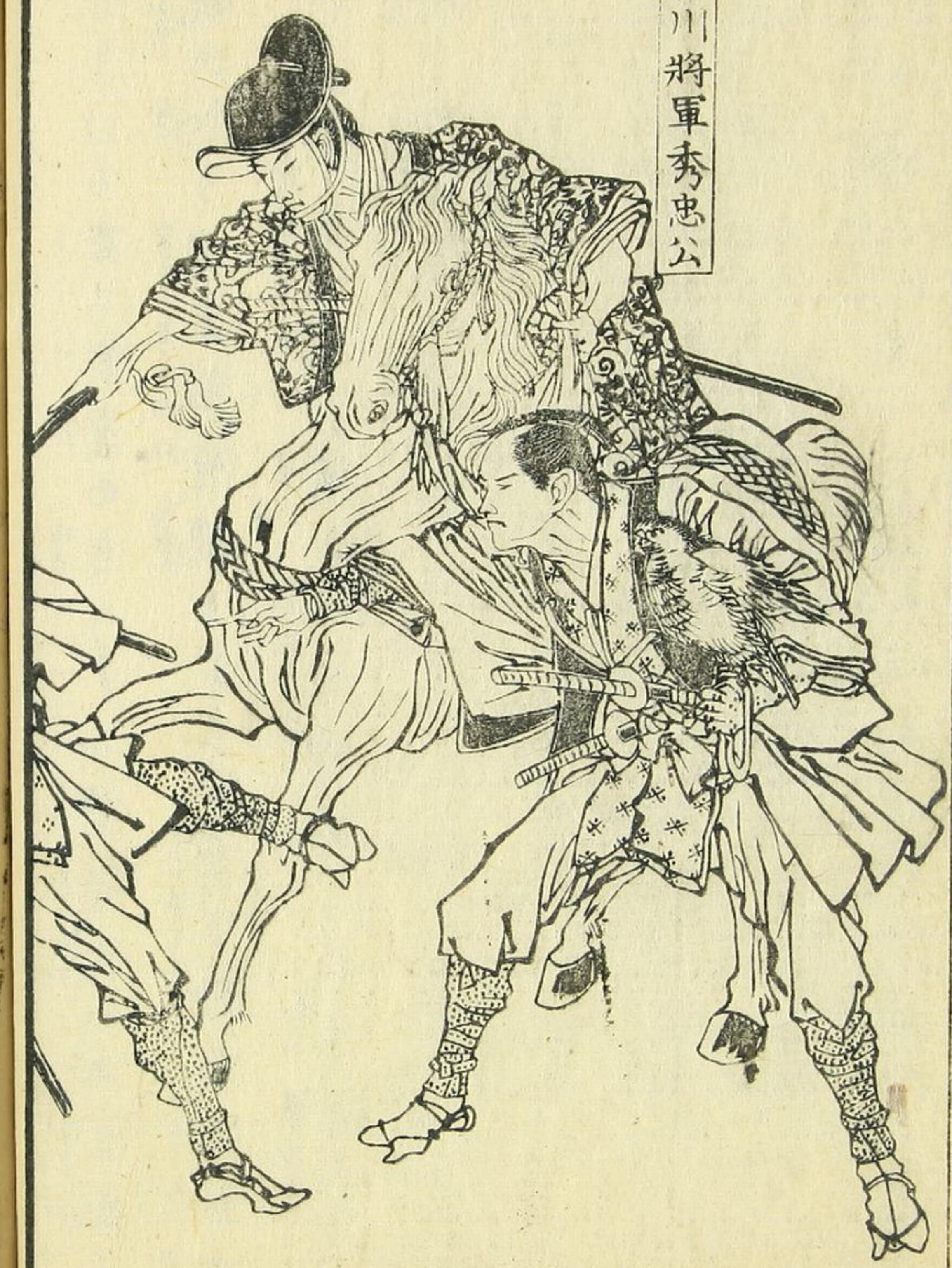
命令と一改易申付づる音板倉伊賀守勝重義
り急ぎ大久保忠憐が旅館へ至る時ふ相模守
朋友と將基を指居けりが家人等周章にて告げ
けりハ只今御上使とく板倉殿済入來り是
へ所改易のゆき使節みく候ふと吐息つきく申け
る相模守も泰然と驕り一家无解の期
ふのぞと將基半ふあく止る残念ありと竟ふ
指おつり持の後浴して服を改め板倉勝重不對

面を時々上使の趣を相模守累年の恩澤を忘却し一方
令坂城へ肩擔せる隱謀をてみ彰然たり之ふ仍く
江州佐和山へ流刑井伊掃部頭へ御預け仰付らる
るの急ぎ那地へ罷越謹慎たるべき旨演舌乃
る忠憐元来篤実ある故一言の陳謝あく畏そ
奉らるる忠諾より板倉帰宿の後へ發足の用意頗
ににて心懐の心あり然るふ洛中大ふ騒乱にてスハ
大久保忠憐関東の命令ふ反し板倉勝重と戰争

及ぶとまゝ巷説なり片桐市之正り大久保と諜間一
兵端を一時ふ開いき銃隊數萬入津鼎一洛中微塵
にうぐべなど庶民大いに恐縮して散乱もると夥
一相模守軍傳え歎息あり吾逆心ありと雖も
公命又駄馬も及ばず仍て伏罪せり然るふ何ぞや
斯る騷乱をうるみ忍びんや乞々静謐ニ治むべき
方策なりとく即時ふ弓銃炮長柄等とぐく縛
ふて東北二条の板倉が役郎へ送り又使節を以

て申入れりて忠憐より佐和山へ謹慎の躬あまび兵畠へ
元より備ふべきよろづ仍く板倉殿へ預け申れ条
貯藏なるわれかと言ふうけり京師の庶民之を
觀て大ふ安堵一儲の忠憐逆謀あり然るうへて戦
争行ふあくまく稍靜謐よりびりる斯く大久保
忠憐を藩士悉く暇を遣りその躬は四五個を
引卒一そく佐和山表へ退隠あせを相州小田原の城
の名上らむ同時ふ大久保の氏族三十七家閉門仰
付らしける斯る異変の有りとを諸藩大いに恐縮し
て疑ひ起り関東駿府穏うあらず案下再說將軍家
みれ二月上旬上総の國ふゆ放鷹有づき旨普告行
て既に東金邊に狩りゆ仍く近領の諸候伯食應
奉る就中里見安房守義忠り此所迄御迎ふ來
う拜禮ありける所俄々上意の声諸共逼至と捕らる
其趣へ舅忠憐と合躰一そく野心を夾むの荼不届ふ
思召改易申付うす旨仰渡され即今奥州へ流刑

徳川將軍秀忠公



里見安房守義忠

無望之禍

義忠

俘獲少支



ありと總の采地を賜りけるが義忠配所ありて死去
せり 叫悲べ一舊家なる里見茲ふ傾覆も然の事
うべ 高力左近太夫も歟絶一又加州の長臣高山右
近長房の別一耶蕪宗門取扱ふより之より
西祥國へ遠流と号して死刑に行ゆれをり却説
江州佐和山みん相模守忠隣其罪にあらず一く
配所の月と詠や葬々として星霜を送るふ井伊
掃部頭の痛ひ一くや思ひけん念頃ふ訊問わりけ

るが一日直孝相模守に對曰貴君ハ徳川家股肱の忠
臣たり如何ぞ野心の謀策やうん之諂舌ふよきる
成ベ一倘公論あうべ小生不肖たりと雖も君へ弁解
致もべーと忠憐落涙一く曰く井伊殿の御懇情九
世の累ともいふ忘却仕うん之片桐が間謀ふされ
を耿然詳解あるに於て小生免罪たるべけど尤
づる時の大切ある御主君讒を信ドキ落度を江
湖へ流布に似たとば升もまの一隻ふ關係一く言だ

路徒に障蔽せりと冒袴を盡キ名言ハ直孝大ニ
感激一暇を乞て退ケ佐和山城中ニ在ベキ事モ
あらず俄然ニ駿府へ下向して相模守グ心底を委
ノノ議論ニ及びけりと大御所黙々とノノ聽ク
忽地醉の醒るが如く达と掌を歩セシハ誠や簡不
損の者ハ防ぎがリと家康間斗ハ載られたり忠
憐元より罪あきを改易申付たるハ吾生前の家疋
ありとア井伊直孝公以テ至急に大久保忠憐を

召返され御勘氣ハ免のう本領もとの如く氏族三十
七家一時ふ序免蒙むきりまハ是慶長十九年九月如
月月下旬の吏みあん達莫大御所アヘ序桐大坂ニ在城
せば戡定公ハ至ラキト我滅後にハ天下亂逆とするべ
と這時より一統を急ぐれウ深く智畧と廻ルシテ
○鴉鶴の譬大野輩失策の吏

夫鷄偶の歎ひハ那唐土ニ月下水人我朝ニテ大社八
百萬神たちが結び人ろ赤縄の糸奇怪ふかく

意恨の端を挙げて茲の發語さん地名ハ泉州場の平
民今井宗薰とりへる個あり其娘ハ近代無双の美人
にて今小町とぞ称へけり升も容貌の絶あるや支那
所謂沈魚落雁倘西洋人一度見テバ嬢娘美婦と
や稱モベ一斯る美色のワタケモバ大野ケ次男主
馬先の冀々を輕羅と成く細腰ふ絡吏を詠一媒妁
を以テ今井許へ縁談ふ及ばざりケルが宗薰元末篤
実ちも在大野等が人品意ス衣ゼズ神速ス断ク

然又片桐主膳正方よりも婚姻の儀申入りモバ
宗薰之ふ同意一ノ鷺偶の儀式を結びシバ大野主
馬ハ勃然と怒り心頭ふ發キとど復いうん共詮方るく
折々父兄に讒言一ノ眞憲のわむらと暗さんとうな夫
人の執念深きハ慾徳より色慾あり故ニ道軒修理
等も自ノ片桐と不和ありに況や今般の神機妙算
大御所公へ間を八一ノ开り九人よろづざる杯城内の
士片桐を賞讃する支那一ノ道軒父子ハ偏執一ノ已モ

威風を輝きさんと一策を施せり先今村傳右エ門と秀
瀬公の使節とて加州宰相利長へ申入けるハ大納
言利家ハ古太閣の厚恩にうそく大国を領へ天下ふ
五老の一個たり殊のみ御後見の筋目ありバ秀瀬不
慮の吏ひるを盡力頼をゆとの事あり又大野父子
よりも別紙を添え其文体みる利長を以て秀瀬
公の御名代とて惣大將よすべしもの綱畧か
然るよ利長ハ関ヶ原御陣より関東元二の御味方な

とお断然返答ありけりハ御使節の趣き心得がく
当家ハ古太閣の所君と蒙るいふ仍く七父利長在世
の折々大坂城へ在勤一秀瀬公を保護一奉毛べ這
義ちを報恩と存トハ利長近年関東の新恩莫大き
時運ハ関東と俱々致モベくハ且ハ秀瀬公御領内狭く
御不自由ふりて貨幣の貢等の仕るべくいと十面
造つて返答に今村ちりく迎帰マ大野ふ斯と告げ
けりふ道軒父子ハ一策の齟齬せり故ふ閉口一々

穏密々致せども隠となるより尚現るゝへ有りと加州より関東へ斯の事件を進達行ひば是より天下一円不流布にて大坂すでふ隠謀あり近きふ兵端を開くべと騒動ある吏大方あらず然るふ慶長十九年二月旗雲の如き之の東西ふ麿麿彗星あらりけれとば廢人人大ふ怪しき恐ろ然るふ其頃朝鮮國より来朝したる儒者李文長之を考へ全く殺氣をふやう大惡星あり遠かずして天下亂逆たりと言ひて復不

慮の吏あり同年三月五日申の刻大坂城の天守より朦朧たる黒丸哉然として立昇り空中を覆ふ吏五行志ふ曰衆平縣の河水に似たり速莫城内ふ同公せし輩へ且そ知らず外より望べひとふ火災の煙ふ似たるを城外ふ居たる諸士へ吾劣らドと汗馬ふ鞭赤駆集りりとふ城内の輩らも大ふ驚驚き俄ニ天守へ近登り空中と見えりすよ黒丸散乱し立麻非さう總トす這の黒煙りに遮民の過災みて悪氣の隨一

寔々皇天言つうだ雲氣と現つて山変と示したる
つゝ更にそれを之性むべきとありふ大坂城内にて
倭人とも會合して是秀瀬公の御開運よりく閑
東滅亡の瑞相あらんと雀躍あるハ金中より涌る魚
の如く又深慮ある葦らひ既ニ肝腦地ニ塗る兵乱
此期近きにあらんと頗る嗟嘆も及ひける

○大佛の法場大ひふ動搖する事

却説序桐且元ハ一層研精の功顯れ大佛殿と落成

せり开り壯觀の花麗たらや義々たら石垣四方ふら
翠の甍朱欄干佛堂雲と壁々旭光ふ映ド玉廊斜ヨ
リて虹の如く朱門の棟札み天下泰平秀瀬武運
長久と筆太ふ書きたり其形勢西洋「ヒラミド」の塔
と欺き左思が十稔の苦を積とも筆をや投へし
わを落成の趣きと大坂城へ報告ある开今般の大
供養ふ秀瀬公御上洛然るべく其故の関東駿府
み籌筭ありとも事故あく修行たりべし倘御上洛

あき内必ず災厄起るべと献言ありけりと秀瀨
公頤小近侍等と會合をさへて這義如何と評定の
よ舌論區々ふ一變せば然るふ大野修理之先
席と進んで言けりハ前方津上洛の節ハ加藤を始
め四將等守護すとさへ免れしに況や自今ハ
碇とあくる供奉の候伯且くう夫遠慮あた
内に必ば近き愁ありまつむ鷺羽无用乎おばされ
御名代と片桐市正警備み七隊の諸將其

外御近臣と差向らき大佛供養然るべと言路滔々と
演舌ひ又衆議是ふ一決ト此旨片桐許へ仰せられ
且元不同心かく再応諫言ひりわれども良葉口小
苦きの敵ひ竟ひ大竹が譏論を呈して上洛する
ゆきよ究まりける升り本日の更務職み右府
公の名代とて總少令片桐市正且元同舎弟主膳
正貞隆寺中の警衛おひ速水甲斐守彌村伊豫守
外勢制禁み津川玄蕃允又僧侶の純老人み

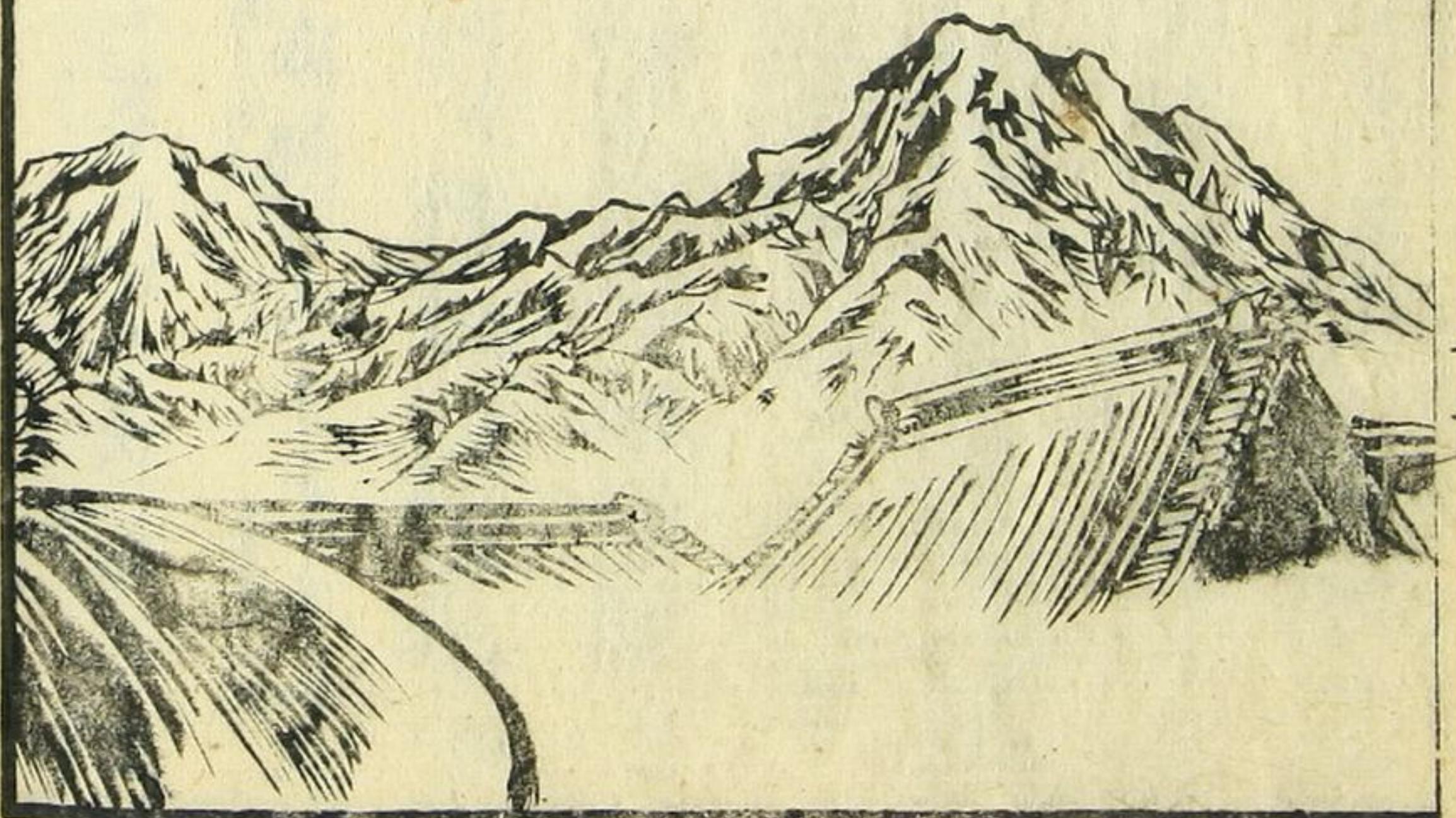
大坂の近臣其外諸役人甲乙三千余人寺院狹一と
相詰たり僧導師みへ嵯峨の大学寺奈良の一乘院
三方院等三門主立せゆひ出仕の僕僕一千人まべく
僧坊二千余人事務嚴クふ配慮せく又 勅使みへ
正親町大納言殿うノ斯ニ大佛供養と拜せんと近
國僻邑の差別あく紫陌不徘徊させバ商賈ハ仮屋の
捷を並ベ理外の利をや得らるべ一寒不や平安城創て
より大約九百有餘年の間み斯る賑ハひありべうも

あくず漢武の五時の神祭ニ有きんを萬燈かげ一被
園精舎もかやと斗りしむベー去るに四月十六日ふへ
大佛供養の日限あるふも前日十五日能然み京師の諸
司代なる板倉伊賀守勝重ハ家臣板倉査石工門を
以て序桐許へ申入けりハ自今大佛鐘の総み日本一
仙一旦那とゆ文章程りあく是日本一の人とゆ文
意をくんり又國家安康と御諱と兩斷トニテ調伏
の語竹りそのえ棟札ニ天下と平均する秀瀬公の祈

禱と爲スる文章ある故に駿府公憤りあひぬ然上
ハ明日供養致さるの延引あつて然るべーとあり片
桐對りて使節と趣き美りぬたかの後府公
御伏の文ある杯の意表ふらむ評非論あり且ハ明日
供養の事規則万端相整ひ近國の御門主始ト
僧侶若干群参一又モ縊縁の爲諸万八斯菴ふ先
満せり去と法筵遷滞せば其の入費幾千をや所詮
今般の供養を修行にての後又至り後府公より

お咎めを且元切服仕るべーと答へて使節を立
飯りて勝重へ斯と告るふ板倉再応押かへて申入れ
又返答承りぬ後難の申開きふ貴殿履服之あ
らを仰分へ相立べー去る伊賀守より躬不肖あ
候へども京地の諸司代にて方今二条ふちり後府の
所不與知りふがく旨して修行之ゆべ勝重が嚴科
陳むの道あり仍て供養の停止たりべく倘まこと
て修行ゆるを急度さ止申すべくとあり片桐心中

洛陽
大佛殿
造立ナ



み憤うるとりども色すゑせば何を御返答へ此
方より申上べーと使者を飯一情思慮と廻らす
に押く供養ある時の必ず修羅の鬪場とあるべ
如何モべきと沈吟モ遮莫若冠の個どりへ軍傳へ
て大ふ噴發一堵々心得ざる賣どもあり板倉どき
の分際みく供養と妨害りとすとも何条恐る賣
あらん斯る非常の手為ふ七組の内兩隊長士分
百騎歩卒甲ひ三千余人斯警衛をあくの自然

卒忽の賣あくべ咱們盡力一防戰モベーと俄然モ
弓銃炮を備へ四面を固め登乱すつ賣夥一又群參
の諸人も一先供養去り人と異口同音ニ喚どり片桐
且く関係せず諸將ふ對一て說得モ武具兵器と取
拂へせり且元一個閑室ニ翼の賣件を右や左と千ヶ
ふ碎や方畧の胸ふ時うる梵鐘も寂滅爲樂の響み
ハ俄よ人の花ぞ散る灯とも一頃ふ成なり天より窓
に大御所みへ今般大佛供養の儀板倉方より差止る

シノイタノ畠
片桐我慢とりつゝ万一千丈を動うへあた勝重
原より寡兵あり仍く努力致まへと内意と受く
井伊直孝池田武藏守グ藩士よど病氣保養と名
はげて洛中所々潜伏せしが板倉許より片桐の應
接かやう爾々と報知を請く諸藩の兵士皆板倉と
合税キスハヒ言を伐破らんと大仏殿の八方と雲霞
の下く東因む人馬の音ふ愕然八声の鶴や乱す
東雲がるゝ成りまへ片桐方より板倉へ使節と以

て申入けりハ駿府公御不審の趣き畏ムニ仍く供養の
期限を延メ一先帰坂仕合モ這の旨後府へ河進達
偏ヘに賴モ存ルト申メ送リつ夫よりハ京洛中へ旨
告メテかさねく供養ありベシと更穏便ふ斗ひケ
毛バ辟參あせシ僧侶等も皆散々ふたりにけり余ハ
あと片桐且元ハ心裡の憤懣を忍び諸士ヒ引率ス
ノ大坂城ヘ退キケリ恐ろフ大佛鐘の移棟札等のモ
ふ付御不審の旨ありケルト東福寺の住職ナリ清韓

長老の學才殊ふ勝れたり清僧もを捕虜うけく二
条の城へ引とゆき座敷牢へぞ入らしけどバ庶人大
ひふ恐怖す儲の今般の事件よそ最経くくぬる
れが這の末天下の乱るべーと庶人眉と顰めり

○坂城の衆議廳に重成明論の吏

大坂城の扇の間みの右大臣秀頼公茲不淀殿出座
大野片桐を下り殿脇の侍師を會合あつて一也方今
越府の御難題大佛丈件を詳解すと臣等が意見

聽まちと公命あるふ大野父子三個の、どのハ言句も
かむ沈吟みせむ列る諸將も大丈の評定謾り不言を
發すりゆく時に席上進出るゝ各將誰ぞと見え
れふ木村長門守重成ちり星霜積つて二十二歳在吾
の君を欺くべき花駒一の白面るぐの胸又孫吳の智を
隠一武勇の英将ウエルリングトンと伯中よ這時小膝
を進ゆく云曰方今駿府の御難題ハ一朝一夕の事よ
あれば丹坂城を傾覆すべき大御所公の宿望

小生承み承つとを當三月東福寺の崇傳長老駿府表へ
下向りて自今大仏鐘の銘竝み棟札へ清韓長老の認
むるところ去と駿府調伏の文章など讒せらむ一
三旅と纏ふ智識の上より道徳重ふゆゑありべ然
不大御所何ぐと詐謀中の折あれハ之抵掌の策
とあり城中の士ふ憤發させ是非兵乱ふ及びつべ
ト云ふ言動う一あくセ時節最力早うべ一 大御
自今于戈を動う一あくセ時節最力早うべ一 大御
所! 在世のそのうちの只穢便ふ斗うふあそ之良策と

片桐殿が先度の議論説得可右まれ左より大御
所へ御陳謝ありて然るべくも今般の済使節へ片
桐殿が智畧ふあらんと至急駿府へ且元殿陳謝の済
使節然ちべくも小生着年の推參みりりどり秀瀨公
所為かくも諸君の批論も不顧冒哀と盡一畢ぬと
祠きし一演舌するふ秀瀨公を始めとして郡七隊
の諸將等も這の明論と可きとて皆下道軒小膝
をす何きる今般の済使節へ片桐氏もあざんば

争ひ和順を殆ぶべし且ハ副使シテ賤息代理那ハ
関東駿府不白汚賞美竹ノ一ものもとば這両名の
外ふあるぬ急ぎ片桐市正大野修理之見元陳謝の
御使節然るべしと演舌竹に引うる各得袖樓引
て笑を忍びつ道軒ゲ我謾と太ら惜しける余バ試
論茲ハ決定一各將退出シテ前四月二十
六日大坂城を去立竹節片桐且元の清江湖の形
勢と思ひ廻らリ秀瀬公の御行跡を痛ミ木村長
門守郡主馬之允両個同席ふと諫言ありけりへ後
府ふ滞留中誰人ウ惡さるに終言や上づきも針ら
わざ殊久ル大御所の虚を計り詐畧を用ひ種
々兩舌あきづる共市正判然申上ざる内ハ百事採
用ありベクビ大臣苟も肝膽を碎き襟畧仕るべく
爰ふ先年関ケ原戦争の前信州上田落城以後票
客と成りて紀州九度山の麓ふ寓居仕ひ真田左工
内佐幸村吏神笑不思儀の良将もとば當時笑東

と牛角の軍仕るべく軍勢ふ於へ臣如きの及ばず
支えみくべと言ひ木村を顧り重成殿内入覗
て秀瀬公へ宣へく就成一茲々一且の浪花不眞居
仕へ後藤又兵衛尉基次次は伴團右工門米田監
物岡部大學淡輪新兵衛是等の五名も御召抱然
アベ一夫三軍へ得やきく一將へ得難一と申キ更
御配慮めつゝ然アベ一と面を侵そ諫言ナリ之や
未前と觀洗る廣量吾あき跡あり真田等ふ秀瀬

公を補佐あきせ大坂城を泰山の安きふ置ん忠烈
義膽吁賞するふ尚あきりやうんう勤く片相市正大
野修羅之亮も君ふ所暇申上げ大坂城を發足に振
ぎに對の鎗梅や活色えする武士が互の意よし
の角くも初る鬼あくも浪花表を汝ゆゑ破河の
ふへ當へてのち片桐ひうち議論を斐つる
キ大御所が籌筭ハ一朝傾覆の変件起るや
开き之次韓の文解を聽候ウ一

官許 明治八年六月廿三日

東京

武野光吉編輯

本銀町四丁目

東京書林後藤忠七版

浪花史畧第二輯卷之二畢

漢語消息往來

中形

全一冊

中形

全三冊

漢語圖解

半紙本

全一冊

漢語圖解

半紙本

全一冊

習字漢語篇

半紙本

全一冊

音訓開化名頭

安齋美雄著

半紙本

全一冊

輿地暗射圖手鑑

横本

全二冊

横須賀安枝著

朝鮮國細見全圖

半紙形

全一折

添崎

延房著

半紙本

朝

鮮

事 情

全二冊

說

瓜生政和著

著

草

中形

全六冊

浪

花

史 略

中形

初編

三

五編迄

肆 京 東 書

丁丁純鶴山森藤和須和岡小山須
子子子 口 岡泉原泉田 城原
屋屋屋屋屋屋屋屋屋屋林屋屋
忠善平喜喜藤治慶勘金伊市嘉新佐茂
五兵兵右兵兵次右衛 兵 兵兵兵
七郎衛衛門衛衛郎門門八衛七衛衛

